

学認が実現する日本の学力水準の向上

私立大学の立場で考える学術認証フェデレーション

成城大学

シングルサインオンを導入することで、頻発する ID・パスワードの紛失を防止するとともに、学外からの電子ジャーナルへのアクセスといった利便性向上も目指す。また、学認を通して生まれる大学間の横のつながりにも期待する。

課題

本学では 2006 年に Webmail を導入以来、e-Learning や履修・シラバスシステムなど、学内 Web サービスの充実を図ってきた。しかし、認証統合という概念を持たずに各部署や担当者が独自に提供しているサービスも多く、利用者に複数の認証情報管理を強いているのが実情である。そのため、利用頻度の少ないサービスでは ID・パスワードの紛失が相次ぎ、再発行業務が頻発している。さらに、電子ジャーナルなどの Web サービスの学外利用を希望する声も多い。こうした利用者の負担の軽減と要望を実現するため、学術認証フェデレーション(学認)との連携を視野に入れた認証基盤の統合を検討した。

解決策

学認が推奨する統合認証基盤はオープンソースの Shibboleth をベースにしており、ライセンスが不要という特長を持つ。しかも、平成 20 年度から開始された実証実験は、担当者レベルでも申請・参加ができ、各大学との連携や学内での事前検証を十分に行うことができた。これにより、導入前の懸念でもあった既存の情報システムへの影響もほとんどないことが確認できた。技術面での課題としては Shibboleth と Active Directory との連携があったが、ML の記事や先行する山形大学の事例の中に有益な情報を見つけることができ、これらの豊富な方法をベースにシステム側の問題はほとんど解決できた。

また、利用者サービスを向上させるため、既存の情報サービスの Shibboleth 対応にも着手した。電子ジャーナルサービスを管轄する図書館に依頼したり、英語自習ソフト「ALC NetAcademy」と交渉を行うなど、シングルサインオン(SSO)に対応した学内サービスの拡充に取り組んでいる。

今後の取り組みとしては、学内 SSO 基盤を有効活用するために Shibboleth に対応したポータルへの導入を急ぎ、利用者の要望を聞きながら本学に最適なポータルサービスに育てていきたい。さらに、安定したネットワーク認証や学内サービスの SSO 対応をさらに進展させるための予算を確保するとともに、SSO 環境の可用性を向上するために認証サーバなどの冗長化にも着手していく。

結果

本学のような中規模私大では、学認が提供する「Fshare」に代表される“あると便利”なサービスを充実させていくことは予算面でも運用面でも難しく、その意味でも学認に参加するメリットは大きいと考える。例えば、Microsoft 社の DreamSpark を使うには国際学生証が必要だったが、学認に参加することでこの発行コストが不要になるなど、学認が提供するサービスを利用している学生や教員から、便利になったという声を多く聞く。

本学における学認参加の最大のメリットは、他大学との連携や交流といった横のつながりが生まれる点にあると考えている。この取り組みを単なる Web サービスの充実に留めてしまわず、本学の学生や教職員にとって、国公立や私立といった枠を超えた学術的な関係を持つ好機となることを期待している。

(成城大学 メディアネットワークセンター 五十嵐 一浩)

